黄昏の地中海

永井荷風

青空文庫

ガスコンの海湾を越え葡萄牙の海岸に沿うて東南へと、やがて西班牙の岸について南にマロツクの陸地と真白なタンヂヱーの人家を望み、北には三角形なすジブラルタルの岩山を見ながら地中海に進み入る時、自分はどうかして自分の乗つて居る此の船が、何かの災難で、破れるか沈むかしてくれゝばよいと祈つた。

さすれば自分は救助船に載せられて、北へも南へも僅か三哩ほどしかない、手に取るやうに見える向の岸に上る事が出来やう。心にもなく日本に帰る道すがら自分は今一度ヨーロツパの土を踏む事が出来やう。ヨーロツパも文明の中心からは遠つて男ははでな着物きて、夜の窓下にセレナドを弾き、女は薔薇の花を黒髪にさしあらはなる半身をマンチラに蔽ひ、夜を明して舞ひ戯るゝ遊楽の西班牙を見る事が出来るであらう。

今、舷から手にとるやうに望まれる向の山――日に照らされて土は乾き、樹木は少く、黄ばんだ草のみに蔽はれた山間に白い壁塗りの人家がチラ〳〵見える、――あの山一ツ越えれば其処は乃ちミユツセが歌つたアンダルジヤぢやないか。ビゼーが不朽の音楽を作つた「カルメン」の故郷ぢやないか。

目もくらむ衣裳の色彩と熱情湧きほとばしる音楽を愛し、風の吹くまゝ気の行くまゝの恋を思ふ人は、誰れか心をドンジヤンが祖国イスパニヤに馳せぬものがあらう。

熱い日の照るこの国には、恋とは男と女の入り乱れて戯れる事のみを意味して、北の人の云

ふやうに、道徳だの、結婚だの、家庭だのと、そんな興のさめる事とは何の関係もないのだ。祭礼の夜に契を結んだ女の色香に飽きたならば、直ちに午過の市場に行きて他の女の手を取り給へ。若し、其の女が人の妻ならば夜の窓にひそんで一挺のマンドリンを弾じつゝ、Deh, vien i alla finestra, O mio tesoro!（あはれ。窓にぞ来よ、わが君よ。モザルトのオペラドンジヤンの歌）と誘ひ給へ。して、事露れなば一振の刃に血を見るばかり。情の火花のぱつと燃えては消え失せる一刹那の夢こそ乃ち熱き此の国の人生の凡てゞあらう。鈴のついた小鼓に、打つ手拍子踏む足拍子の音烈しく、アンダルジヤの少女が両手の指にカスタニエツト打鳴らし、五色の染色きらめく裾を蹴立てゝ乱れ舞ふ此の国特種の音楽のすさまじさ。嵐の如くいよ〳〵酣にていよ〳〵急激に、聞く人見る人、目も眩み心も覆る楽と舞、忽然として止む時はさながら美しき宝石の、砕け、飛び、散つたのを見る時の心地に等しく、初めてあつと疲れの吐息を漏すばかり。この国の人生はこの音楽の其の通りであらう……

　然るを船は悠然として、吾が実現すべからざる欲望には何の関係もなく、左右の舷に海峡の水を蹴つて、遠く沖合に進み出た。突出たジブラルタルの巌壁は、其の背面に落ちる折からの夕日の光で、燃える焔の中に屹立してゐる。其の正面、一帯の水を隔てたタンヂエーの人家と低く延長したマロツクの山とは薔薇色から紫色にと変つて行つた。

　然し、徐々に黄昏の光の消え行く頃には其の山も其の岩も皆遠く西の方水平線の下に沈んで了ひ、食事を終つて再び甲板の欄干に身を倚せた時、自分は茫々たる大海原の水の色のみ大西

洋とは驚く程異つた紺色を呈し、天鵞絨のやうに滑に輝いて居るのを認めるばかりであつた。

けれども、この水の色は、山よりも川よりも湖よりも、また更に云はれぬ優しい空想を惹起す。此の水の色を見詰めて居ると、太古の文芸がこの水の漂ふ岸辺から発生した歴史から、美しい女神ベヌスが紫の波より産れ出たと伝ふ其れ等の神話までが、如何にも自然で、決して無理でないと首肯かれる。

星が燦き出した。其の光は鋭く其の形は大きくて、象徴的な絵で見る如く正しく五つの角々があり得るやうに思はれる。空は澄んで暗碧の色は飽くまで濃い。水は空と同じ色ながら其の境ははつきりと区別されてゐる。凡てが夜でも——月もない夜ながら——云ふに云はれず明くて、山一つ見えない空間にも何処かに正しい秩序と調和の気が通つて居るやうに思はれた。あゝ端麗な地中海の夜よ。自分は偶然輪郭の極めて明晰な古代の裸体像を思出した。クラシツク芸術の美麗を思出した。ベルサイユ庭苑の一斉に刈込まれた樹木の列を思ひ出した。わが作品も此の如くあれ。夜のやうな漠とした憂愁の影に包まれて、色と音と薫香との感激をもて一糸を乱さず織りなされた錦襴の帷の粛然として垂れたるが如くなれと心に念じた。

地中海に入つて確か二日目の晩である。遠く南方に陸地が見えた。北亜弗利加のアルジエリイあたりであらう。

食事の後甲板に出ると夕凪ぎの海原は波一つなく、その濃い紺色の水の面は磨き上げた宝石

の面のやうに一層の光沢を帯び、欄干から下をのぞくと自分の顔までが映るかと思はれた——美しい童貞の顔のやうになつて映るかと思はれた。無限の大空には雲の影一ツない。昼の中は烈しい日の光で飽くまで透明であつた空の藍色は、薄く薔薇色を帯びてどんよりと朧ろになつた。仏蘭西で見ると同じやうな蒼い黄昏の微光は甲板上の諸有るものに、船梯子や欄干や船室の壁や種々の綱なぞに優しい神秘の影を投げるので、殊に白く塗り立てた短艇にも何か怪しい生命が吹き込まれたやうに思はれる。

そよ吹く風は丁度酣なる春の夜の如く爽かに静に、身も溶けるやうに暖く、海上の大なる沈静が心を澄ませる。

自分の心は全く空虚になつた。悲しいとも、淋しいとも、嬉しいとも、何とも思ふ事が出来ない。唯非常に心持がよくて堪へられない事だけを意識するに止まつてゐる。自分は却て大なる苦痛に悩むがやうにどつさり有り合ふ長椅子に身を落し、遠く空のはづれに眼を移した。

夕の明い星は五ツ六ツともう燦き初めて居る。自分はぢつと其の美しい光を見詰めて居ると、何時か云はれぬ詩情が胸の底から湧起つて来て殆ど押へ切れぬやうな気がする。肺腑の底から自分はこの暮れ行く地中海の海原に対して、声一杯に美しい歌を唄つて見たいと思つた。すると、まだ歌はぬ先から、自分の想像した歌は美しい声となつて、ゆるやかな波のうねりに連れて、遠く〳〵の空間に漂ひ消えて行く有様が、もう目に見えるやうな気がする。

自分は長椅子から立上り爽な風に面を吹かせ、暖く静かな空気を肺臓一ぱいに吸込み、遠く

の星の殊更美しい一ツを見詰めて、さて唇を開いて声を出さうとすると、哀れ心ばかり余りに急き立つて居た為めか、自分はどう云ふ歌を唄ふのであつたか、すつかり選択する事を忘れて居た。歌謡は要らない。節ばかりでもよい。直様さう思つて、自分は先づ la, la, la……と声を出して見たが、其れさへも、どう云ふ節で歌つてよいのか又迷つた。

自分は非常に狼狽して、頻に何か覚えて居る節をば記憶から捜し出さうと試みた。紫色の波は朗かな自分の声の流出るのを、今か〳〵と待つやうに動き、星の光は若い女の眼の如くじれつたさうに輝いてゐる。

自分は漸くカワレリヤ、ルスチカナの幕開きに淋しい立琴を合方にして歌ふシチリヤナの一節を思付いた。あの節の中には南伊太利亜の燃える情と、又何処となしに孤島の淋しさが含まれて居て、声を長く引く調子の其れとなく、日本人の耳には船歌とも思はれるやうな処がある。航海する今の身の上、此の歌にしくものは有るまいと、自分は非常に勇立つて、先づ其の第一句を試みやうとしたが、O Lola, bianca come——と云ふ文句ばかりで其の後を忘れて了つた。

あれは、自分がよく知らない伊太利語だから記憶して居ないのも無理はない。トリスタンの幕開、檣の上で船頭の歌ふ歌、此の方が猶よく境遇に適して居やう。処が今度は歌の文句ばかりで、唱ふべき必要の節が怪しくなつて居る。いか程歌ひたいと思つても、ヨーロツパの歌は唄ひにくい。日本に生れた自分は自国の歌を唄ふより仕方がないのか。自分はこの場合の感情——フランスの恋と芸術とを後にして、単調な生活の果てには死のみが待つて居る東洋の端れ

に旅して行く。其れ等の思ひを遺憾なく云ひ現した日本語の歌があるかどうかと考へた。

然し此れは歌ひにくい西洋の歌に失望するよりも更に深い失望を感ぜねばならぬ。「おしよろ高島」と能く人が歌ふ。悲しくツていゝ節だと賞める。けれども旅と追分節と云ふ事のみが僅な関係を持つて居るだけで、ギリシヤの神話を思出す様な地中海の夕暮に対する感情とは余りに不調和ではないか。「竹本」や「常磐津」を初め凡ての浄瑠璃は立派に複雑な感激を現して居るけれど、「音楽」から見れば歌曲と云はうよりは楽器を用ゐる朗読詩とも云ふべく、咄嗟の感情に訴へるには冷か過ぎる。「哥沢節」は時代のちがつた花柳界の弱い卿ちを伝へたに過ぎず、「謡曲」は仏教的の悲哀を含むだけ古雅であるだけ二十世紀の汽船とは到底相容れざる処がある。あれは苫舟で艫の音を聞きながら遠くに墨絵のやうな松の岸辺を見る景色でなくてはならぬ。其他には薩摩琵琶歌だの漢詩朗吟なぞも存在しているが、此れも同じく色彩の極めて単純な日本特有の背景と一致した場合、初歩期の単調が、ある粗朴な悲哀の美感を催させるばかりである。

自分は全く絶望した。自分はいか程溢るゝ感激、乱るゝ情緒に悶えても其れを発表すべく其れを訴ふべき音楽を持つて居ない国民であるのだ。かゝる国民かゝる人種が世界の他にあるであらうか。

下の甲板から此の時印度の殖民地へ出稼ぎに行くイギリスの鉄道工夫が二三人と、香港へ行くとか云ふ身許の知れぬ女とが声を合せて歌ふのを聞付けた。滑稽な軽佻な調子から、それは

ロンドンの東街の寄席などで歌ふ流行唄らしい。音楽としては無論何の価値もないものだけに、聞き澄して居るとイギリスの労働者が海を越して遠く熱帯の地に出稼ぎに行く心持が、汚い三等室や薄暗い甲板の有様と釣合つて非常に能く表現されて居る。

幸福な国民ではないか。イギリスの文明は下層の労働者にまで淋しい旅愁を託するに適すべき一種の音楽を与へた。明治の文明。それは吾々に限り知られぬ煩悶を誘つたばかりで、それを訴ふべく託すべき何物をも与へなかつた。吾等が心情は已に古物となつた封建時代の音楽に取り縋がらうには余りに遠く掛け離れてしまつたし、と云つて逸散に欧洲の音楽に赴かんとすれば、吾等は如何なる偏頗の愛好心を以てするも猶風土人情の止みがたき差別を感ずるであらう。

吾等は哀れむべき国民である。国土を失つたポーランドの民よ。自由を持たぬロシヤ人よ。諸君は猶シヨーパンとチヤイコウスキーを有してゐるではないか。

夜の進むにつれて水は黒く輝き空は次第に不思議な光沢を帯びて、恐ろしく底深く見え、星の光の明く数多い事は又驚くばかりである。神秘なる北アフリカに近い地中海の空よ。イギリスの工夫が歌ふ唄は物哀れに此の神秘の空に消えて行く。

歌へ。歌へ。幸福なる彼等。

自分は星斗賑しき空をば遠く仰ぎながら、心の中には今日よりして四十幾日、長い〳〵船路の果に横はる恐しい島嶼の事を思浮べた。自分はどうしてむざ〳〵巴里を去ることが出来た

のであらう。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆56　海」作品社
　1987（昭和62）年6月25日第1刷発行
　1999（平成11）年8月25日第10刷発行
底本の親本：「荷風全集　第三巻」岩波書店
　1963（昭和38）年8月発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2009年12月3日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黄昏の地中海

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/